



ブリティッシュヒルズ における教育研修の目的と効果

British Hills

研修開発ディレクター 松為 信文

I. 現行システムが開発された背景

日本人の多くの方は、何年も英語を勉強しているにもかかわらず、英語のコミュニケーションに「自信が無い」と考えています。一方、ほんの1年程外国に留学した経験のある方は「自然と身に付いた」と経験談を語っています。「自然に身に付く」のなら・・・と発想を転換すると、当然「勉強する必要はない」と考えます。そして母国語の習得過程が思い浮かんできます。小学校入学前の6歳までは、特に読み書きを勉強せずに、両親との日常会話にも困らなかったのではないのでしょうか。では、着眼点を変えて、学校に行かずに、特に日本語を勉強しなくても「自然に身に付く」機能が人間に備わっており、なんらかのコツをつかみさえすればよいとしましょう。例えば、自転車に乗れるようになった状況を思い出してみると・・・、そもそも自転車に乗るためのマニュアルを勉強してから自転車に乗ったのでしょうか？それとも、マニュアルを読まずに、いきなり自転車に乗ったのでしょうか。そのとおり、転んでかすり傷を作りながら、両親に助けられ、何時間か練習して自然に自転車に乗れるようになったという記憶があります。コツをつかみ、体で覚えた自転車の乗り方は、ほぼ一生の忘れることはないでしょう。英会話も自転車と同じ・・・、英会話のマニュアルを勉強してから始めるより、実践で英語を使い、たどたどしくても、誤りを繰り返しながら、面白く、楽しみながら実体験の中で経験を積み、コツをつかむことが必要であるとの観点から体験型英語学習法の発想が生まれ、多くのプログラムが開発されています。

ブリティッシュヒルズの英語レッスンの特色は下記の3点に要約されます。

- ① 日本人が最も苦手とする英語運用力を伸ばす「アウトプット主導型」レッスンです。
- ② 受講生は課題解決に取り組み、まずは知っている英語を使ってみることから始まります。
- ③ インプット〈講師からのヘルプ〉は各場面で受講生が実際に必要とする点のみです。

Why British Hills? 基本ポリシー (1) Approach (理念)

通常の英会話学校で、まず学習項目をインプットすることが出発点となるレッスン方法とは異なります。BHでは英語の知識についてのマニュアルの勉強ではなく、実体験の場として「英語を使用する場・機会」が提供され、勉強する意識を持たずに、自然に理解し、学習できる学習環境が整備されます。

II. 日本の英語教育事情の認識

日本の英語教育の方法論については大きく分けると、Traditional Approach 時代を経て **Communicative Approach** に変化してまいりました。学校教育においては、現在でも、入試事情から TA を選択せざるを得ない事情もあり、国際コミュニケーション能力とは異なるアプローチが導入されているようです。英会話学校でも CA を導入したカリキュラムが普及しております。しかしながら、基本的には下記のような授業形態が現在でも各学校の教育事情から実施されているようです。

日本の英語教育の基本的な授業形態

- ① 講師によりテキストにそった英語知識のインプットと正確さに重点が置かれる。
- ② 授業の最後にテストしてインプットされた学習内容を正しく習得したかどうかをチェックする。
- ④ 疑問や応答による自然な発話形態から生じる「流暢さ」は問題にされない。

Why British Hills? 基本ポリシー(2) Approach (理念) Focus on Fluency

このような学習形態を否定することはできませんが、コミュニケーション能力の養成の観点から見ると受講生には退屈であり学習自体が楽しく感じられず、結果的に英語が嫌いになる要因となっていきます。BH では楽しく学習するための 70 種類以上のアクティビティーを用意し、英語についての勉強の意識を感じさせないようレッスンが実施されます。

〈Output led to the use of English to do tasks for fun through activities.〉

Differences between Japanese and Imported Approaches (Miller, 2001)

	学校教育 / Traditional Approach	英会話学校 Communicative Approach
Goals	入試に必要な知識	コミュニケーション能力
Language Activity	ドリル・訳読・暗記	会話・ペア・グループワーク
Content	過去問題・問題集	日常会話・個人的会話
Teacher roles	情報提供者	カウンセラー
Student roles	受身	能動的
Correctness	言語の形態	意味内容
Atmosphere	静か・統一的	賑やか・非統一的

Ⅲ.日本でCAを導入する場合の留意点

日本の CA を考える場合、上記の比較表のように、あらゆる項目において日本の伝統的な英語の教え方と CA とは正反対の性質を持っていることが確認できます。CA は日本の多くの英語教育現場で取り入れられている手法ではありますが、CA の基本的な考え方のベースになっているものは、英語が日常的に使われている環境 (ESL 環境) で考えられた方法論です。(上智大学 吉田研作先生) 日本のように英語が日常的に使われていない環境 (EFL 環境) で考えられた手法ではありません。それは単純に、身近に英語を使用する英語環境の有無を意味しています。例えば、授業の後、教室を一步出れば、常に英語の環境であるか、無いかの違いです。ESL 環境は英語が日常的に使われる環境 (イマージョン) の中での方法論であり、教え方も、英語が 日常的に使われない EFL 環境 と違い、同じ土壌で比較することは必ずしも的確ではありません。英語が日常的に使用できる ESL 環境であれば、授業で学習した単語やフレーズ、文型は、教室外でも日常的に耳にしたり使用したりする 有意義な英語の使用機会 に毎日の生活の中で遭遇するチャンスが常に身近にあります。これが EFL 環境と ESL 環境の絶対的な違いです。ひいては、暗記力、記憶力、定着にも影響を及ぼし学習効果に大きく影響し ESL 環境での学習の定着を早めることとなります。日本では CA を導入する場合には、ESL 環境を整えた上での CA の導入が考慮されていなければなりません。即ち、英語が日常的に使われる環境、有意義な英語に接する機会を整備した英語環境を用意することが出来れば、日本にいながらして外国で生活していると同じような ESL 環境での効果が期待できると考えます。

Why British Hills? 基本ポリシー(3) Curriculum & syllabus (カリキュラム・シラバス) Total Immersion Program

通常の英会話学校、学校教育の形態では、英語が日常的に使われる環境、有意義な英語に接する機会を EFL 環境での設定は難しい面があります。宿泊滞在型研修施設 BH では、パスポートのいらない英国生活を基本理念に、英国様式の建物と生活様式の中での生活実体験を通して、英語が日常的に使われる環境と 有意義な英語に接する機会をトータル イマージョン設定にてプログラムが開発されています。

ESL 環境(英語が日常的に使われる環境)と EFL 環境(外国語としての英語教育環境)の相違

(上智大学 吉田研作先生)

- ① CA の基本的な特質は、英語が日常的に使われる ESL 環境 で生み出された考え方であり、その方法論は、日本のような EFL 環境 で、そのまま通用する保証はない。
- ② 日本独自の環境(社会、語学、教育)が存在し(英語が日常的に使われる環境ではない)、それを考慮した CA を考えなければならない。

IV. 英語教授法の 3 つの基本的概念から見た日本の CA

上智大学 吉田研作先生の「日本の CA を考える」において、日本独自の CA を考える場合に下記の **3 つの基本概念**を基準に学校教育における CA を次のように指摘しています。 A).教える目標や生徒のニーズに合わせて、プログラム作成してみると下記のケース①と②のケースのような構成が考えられます。どちらも教授法を考える際の基本概念で作成されプログラムですが、アプローチが異なれば学習効果においても正反対になります。 B)日本での CA は日本の英語教育に導入され普及していますが、日本の英語教育事情や英語環境において CA が効果的に機能しているとは限らない場合があります。 C)EFL 環境で CA を実現するには、英語に接する機会が時間的、量的に満たされないならば、質的に高いインプット、アウトプット、インタラクション環境を整備し、同時に、授業展開や文法指導の導入とその適正な時間配分、言語材料、ファンクションの選択、適正教材等のソフト面を考えなければなりません。

教授法を考える際の 3 つの基本概念 〈Richards & Rodgers, 2001〉

Approach 言語習得・教育 に対する基本的考え方・ 理念	①目指す高校や大学に入学する目的
	②国際コミュニケーション能力（国際的場面でのコミュニケーション能力）
Design 決められた理念を実現す ためのカリキュラム・ シラバス	①カリキュラムは目的達成に必要な時間数や時間割により構成され、シラバスは入試単語集、文法、過去問題集等を中心に構成する。
	②英語によるコミュニケーション場面を用いた活動や言語タスク、言語表現の練習などをどのように組み合わせるか
Procedure 「理念」実現の具体案で あるカリキュラム・シラ バスを実現するための具 体的教え方・ アクティビティ	①文法・訳読・ドリル・重要構文・語彙テストなどから構成する
	②会話、スピーチ、プレゼンテーション、ディスカッション、ペアワーク、グループワーク等で構成される

Why British Hills? 基本ポリシー(4)カリキュラム・シラバス Balance of Fluency & Accuracy / Output & Input

通常の英会話学校、学校教育では、週の授業時間数や年間授業計画に制約されるため目標言語習得に必要な時間数を設定することが難しい場合があります。 BH では滞在型宿伯研修形態にて目標言語習得に必要な時間数を集中的に設定することができ、質的、量的に高いインプット、アウトプット、インタラクションがカリキュラムにバランスよく反映されています。

以上のような指摘を踏まえ、日本の英語教育における CA の盲点を下記のように推察します。

- CA が導入されてもオーラルアプローチは実際に学校授業に取り入れられ、特に入門期の英語教授においては重要な要素の一つである。また、言語形式だけでは不十分であり、語彙の制限、創造性に欠ける。
- 実際のコミュニケーションにおいては、言語形式よりも「意味づけ」が優先され、その語彙の持ちうる意味が決定され、言葉は生きている。それゆえ、リスニングにおいては「翻訳」より「理解」、スピーキングにおいては、「文法」より「意思疎通」が優勢される
- CA は「流暢さ」、「話す力」が優先しリーディング、ライティング力が欠如し、ドリルや誤りの訂正と言った言語形式に焦点を当てて教授することを回避するため文法指導がなく、相互作用があっても個人の思考へと広がらない。
- 一見インターラクティブであっても入門期においては言語形式の認識が不十分であると、実は生徒には何の力にもなっていない場合が多い。所謂、Accuracy の不足であるが、教育活動の全体の中での英語科であるため時間的な増設は無理である。

V.日本のEFL環境における英語に接する時間の量的条件の整備

更に、吉田研作先生は、日本のCAの現状を次のように分析されています。日本のEFL環境での英語に接する時間（機会）の量的機会、週（学習時間数）以外に、学校外（授業外）で、ESL環境のように英語に接する機会は殆ど皆無と言っても過言ではないでしょう。量的に限られた英語に接する機会の環境をどのようにして量的にrichな環境に変えるかを考えなければなりません。EFL環境では量的には限界があり、教え方の工夫や、限られた英語使用機会を量的にrichな学習環境に転換できるかが課題となります。

1.日本の学校教育におけるCAの現状

有意義な英語の使用機会（Amount of Exposure to Meaningful English）はESL環境ではrich & sufficientにたいしてEFL環境ではpoor & insufficientであり、中学校では週3時間、高校では5時間、学校外では実質的に、自ら率先して英語に接しようとしなければ、英語に接する機会は皆無であるのが現状です。

2.日本のEFL環境におけるCAの条件<1>量的条件

EFL環境の物理的環境の整備例（有意義な英語に接する機会の量的改革）

物理的環境

English Immersion Camps, Study Abroad, 空き室利用、放送施設の利用、携帯電話の利用、IT

人的環境

ELT /ALT は英語に接する機会が作れる最高の人的リソースですが、授業外でも英語で自由にコミュニケーションできる場面を作る必要があります。文化交流 International day で外国の文化に接する機会を増やし、中国、韓国等英語圏ではない人々と英語で話す機会を増やす必要があります。

3.日本のEFL環境におけるCAの条件<2>質的条件

量的に限られた環境をどのようにして量的にrichな環境に変えるか、環境を質的に変化させ、また、教え方自体（Quality of Teaching）を質的に変えることにより、限られた範囲内で量的にrichな学習環境を作成しなければなりません。

EFL環境の質的環境の整備例（有意義な英語に接する機会の量的不足を補うための質的改革）

教育改革カリキュラム、シラバス、テクニクスを工夫し有意義で面白い英語に接する機会を増やす必要があります。

2003年度から文科省の指導の下で始まった、60,000人を対象とした英語教員全員の資質向上研修の結果、コミュニケーション型教授法を学んだ教師に習った生徒の英語力は研修を受けていない教師に習った生徒の英語力よりも高いことが分かってきている。

<IV, Vの参考文献：文科省 第一研修グループ報告書・「日本のCAをもう一度考える」 吉田研作>

Why British Hills? 基本ポリシー<5>カリキュラムの基本構成

通常の英会話学校・学校教育にはできないCA環境がブリティッシュヒルズには完備されています。

- ① ブリティッシュヒルズのCAはESL環境（英語が日常的に使われる環境）を限りなく演出した有意義な英語に接する機会を創造した英語環境でのCAで構成する。
- ② ブリティッシュヒルズのCAはEFL環境でのCAの量的条件・質的条件（英語に接する時間の量的条件と質的条件）を満たしたカリキュラムで構成する。
- ③ブリティッシュヒルズのCAはトータル イマージョン形態で設定され、EFL環境でのCAの条件が完備されている。

VI. 教育基本方針と教育研修部の姿勢

語学の習得にこれと言う特効薬としての教授法はないのが現実であり、仮にあったとしたら、日本人の多くが現時点で英語をマスターしているでしょう。その中で理論は理論として、教育研修部は日本人のための、日本独自の環境に則し、ブリティッシュヒルズの語学環境と教育資源を活用した英語の使用機会と有意義な英語に接する機会をより多くプログラムに反映させる方法論を追求し、他の語学研修施設

ではできないホスピタリティーと英語教育をコラボレートする独自のトータルイマージョンプログラムを開発し、同時に英語使用環境や教育環境がホスピタリティー部門のサービス資源となりうることを目標にプログラムの開発に努めていかなければなりません。

Ⅶ. トータルイマージョンの定義 (immersion = 液体に浸す・キリスト教の洗礼・Total Immersion = 全身洗礼⇒英語漬け)

【Total immersion in the English language from the moment of arrival until departure.】

ブリティッシュヒルズの研修プログラムは教育研修部のレッスンプログラムとして単体で独立した形態では効果は半減してしまいます。お客様の到着から出発までを英語環境に設定した宿泊滞在型トータルイマージョンプログラムであることを前提に作成されるプログラムです。その意味では、ホスピタリティー (hospitality) として英語でお客様をもてなし歓迎することが研修プログラムの一部でありコラボレートしていかなければなりません。また、研修プログラムは研修サービスの観点からホスピタリティーとしてのサービスの一環であるとの認識が必要です。

トータルイマージョンプログラムの前提条件

1. 授業外でのブリティッシュヒルズ館内での外国人講師、外国人スタッフそのものの存在はトータルイマージョンにおける教材の一部であり教育資源です。
2. 宿泊、料飲、調理の3部門のサービスはトータルイマージョンプログラムの一部となり、研修プログラムを構成しています。これらのサービスやコラボレーションをなくしてトータルイマージョンは完成しません。
3. 建物・調度品類の管理維持、冬場の雪対策があり、12～19世紀建築様式と環境が保たれていることが、お客様〈受講生〉に本物の環境での異文化体験の好印象と共に教育研修に大きな感動を与え、その感動が学習効果を誘引しトータルイマージョンプログラムをサポートしていることを忘れてはなりません。
4. 宿泊滞在型研修施設において、パスポートのいらぬ英国生活を基本理念に、英国様式の建物と生活様式の中での生活実体験を通して、英語が日常的に使われる環境と有意義な英語に接する機会をトータルイマージョン設定にてプログラムが開発されています。

Ⅷ. トータルイマージョンプログラム形態における期待効果とその臨界点について

海外留学経験者、海外赴任経験者の多くが、イマージョン環境にて「英語漬け」になった状態において、一年程度の留学生活・海外生活で「自然と知らないうちに・・・英語での生活に困らず、ほぼ完全に相手の言うことを理解し、意思の疎通がはかれ、学校や職場でコミュニケーションに困らなくなったような気がする」と言うお話を体験談として、よく耳にします。

これは、TOEIC で言うところの 730 以上のコミュニケーション能力と仮定し、英語を使用して、大學生活、通常の職務が遂行できる程度と推測し、これらの実態から、英語が日常的に使われる環境で有意義な英語に接する機会が1日8時間、約一年間を通して2,000時間と設定し、これを、自然と知らないうちに身に付くまでの英語習得過程における臨界点と仮定します。

また、彼らの言う「自然と知らないうちに困らなくなったような気がする」に注目すると、人間の運動機能、例えば、自転車に乗れるまでの過程や水泳、卓球、野球のように、人によってその差はあるものの、一定時間の訓練や実体験を通じて「体が覚える」、あるいは「コツをつかむ」と言ったような段階的な臨界点が存在するものと推察し、語学習得過程にも習得段階別に臨界点があると考えます。

宿泊滞在型トータルイマージョン設定における研修プログラムと ESL 環境における海外生活と比較することは、英語の使用頻度・密度、個々の英語環境等において、必ずしも同一視できませんが、理論

的な背景は別として独自の観点から、総合英語体験時間数と英語習得過程の相互作用について検証いたします。

「英語が自然に身に付く」、「知らないうちにコツをつかむようになる」状況は、幼児の言語習得過程に見られる「模倣と反復」による習得法に原理原則がありますが、今回は、成人学習者を対象とした総合英語体験時間数と臨界点の観点から、例えば、英語を6年から8年間学校教育を通じて勉強した学習者が、英語でのコミュニケーション〈英会話〉が「苦手」であるが「読み」、「書き」においては、ある特定の語彙を除き文字で認識し理解できるにも拘らず「聞く」、「話す」能力に対して拒否反応を起こしている。所謂、成人学習者の英語アレルギー症候群に見られるリスニングとスピーキングの症状を例に説明いたします。

この現象は、「英語で書かれた文章が読めて且つ理解できる」だけの読解力がありながら、英語音声に対してリスニング力が不足している状況であり、英語が聴き取れない症状であると考えます。このような状況での特効薬はありませんが、英語を「聴く」際の意識として、ある特定の日本語表現においてリズムがあるように、例えば、「御経」を読む場合や「数字」を読む場合に4拍子のリズムを感じると同様に英語にも4拍子のリズムがあることを認識し、意識して英語の強弱のリズムを感じられるようになることが必要です。

総合英語体験時間数と段階別臨界点

第1段階

英語表現の中の「強く聞こえる」ストレスの置かれた音声を、その表現上における重要な意味を表すキーワードとして、聴き取れる段階を**第一段階とし「限られたキーワードが点で聞き取れる状況」と**します。限られたキーワードとは、表現の中の単語が部分的にところどころキーワードとして、聞き取れる状態であり、「点」あるいは「点線」のような状態にあることを意味します。

第2段階

次に、この段階が進化し、「2ないし3のキーワード」をところどころ単語が抜けた点線状態「— — — ● — — ● — — — ●」になると英語表現の意味が相手の表情や状況による視覚のイメージから「意味の推測」が可能になる段階を**第二段階**とします。

第3段階

更に進化し、点線の音声が入と点が入が連結した**短い音のブロック**「●————●/————●/————●」状態で聞き取れる段階になるとリスニングの**第3段階**に到達し、表現内容の意味を「確信」をもって「理解」できる段階になります。例えば、What is your name? を4語の単語で聞き取るより、ワッチュワネイムと音のイメージとして短いブロックで聴き取れる段階を意味しています。

これまでの段階で短い音のブロックを「音のイメージ」として聴き取り、「文字のイメージ」が頭の中で文字をイメージすることなく「音のイメージ」として聞き取り、10語以内の英語表現を、音声で「模倣し反復できる」状態から更に「再生」できる状態に至ると**第3段階の臨界点 50時間から100時間**に到達いたします。但し、各段階の臨界時間数は個々のレベルでそのスタート地点は異なり、個々のレベルでその進捗度も異なります。

即ち、第3段階までに、文字として言語を処理する左脳で理解するのではなく、耳から聞こえてくる音声「音のイメージ」を、目で見える「視覚のイメージ」として処理する右脳で理解するように訓練することが必要になります。その方法として、BHのイメージ環境によるアクティビティーを通して聞こえてくる音のイメージを実体験から視覚のイメージに転換し右脳を鍛えることは効果的な方法です。

例えば、クッキングクラスで「mix」が音声として「ミックス」と聞こえ認識できたとし、その意味が理解できない場合には、「ミックス」の動作を、実体験を通して「視覚のイメージ」に置き換え右脳で理解する訓練等は、Total Physical Response、English for Specific Purpose (EAP,EOP,EVP,EBE, EST, etc.) によるアプローチ等がこうした効果をサポートしていると考えます。

また、この段階までの、相乗効果として、学校教育による文法指導時間数の不足を、イマージョン環境による右脳訓練が音のイメージの再生、定着の臨界点を経て、BH 独自のインプット法(知りたい時に、知りたい情報を適確に実体験を通して提供)による文法・文型の情報提供及び右脳訓練が相互に作用し、コミュニケーションが図れた喜びを喚起し、同時にタスクの達成感が受講生の「学習の楽しさ」を誘引する上に文法・文型の定着を促進し、ひいては、考えて表現する思考を広げる効果が期待できます。

BH のイマージョン環境とアクティビティーは、「英語を使用する」、「英語を使用させる」、「英語を使用することができる」環境とプログラムで構成されています。そして、これらのプログラムは、日本の英語教育における CA 環境の量的弱点である英語を使用する環境の不備を、英語が日常的に使われる環境と有意味な英語に接する機会を整備したブリティッシュヒルズが補いその具現化が可能と考えます。

また、CA 環境の質的弱点を BH の宿泊滞在型集中研修形態による 50 時間から 100 時間の臨界学習時間数を、体験学習型アクティビティーを通じて、英語の導入期、中学校・高等学校、成人学習者等に、耳から聞こえてくる音声、「音のイメージ」を、目で見える「視覚のイメージ」として処理し、右脳で理解できるようにする右脳訓練を実体験することにより、日本にいながらして外国で生活していると同じような ESL 環境での効果が期待できると考えます。

第 4 段階及び第 5 段階

第 4 段階から、スピーキングの第一ステージに入り、聞き取れた音声ブロックを「反復」し「再生」出来る状態から時間を置かずに模倣し再生できる段階、所謂、リピート(repeat)段階から数秒の時間を置いて「再生」するシャドウ (shadowing) 段階になり、音のイメージを残像に残し時間を置いて再生する「残像再生段階」に至り、**第 5 段階の臨界点 100 時間から 150 時間**に到達します。

第 6 段階

更に数時間もしくは数日しても「音のイメージ」で「再生」できる段階を経て、発話時に音のイメージで「表現」できる状態を**音のイメージの定着段階**とし、音のイメージと視覚のイメージで意思の疎通がはかれ、リスニング技術とスピーキング技術が相互に作用した会話が可能なコミュニケーション型 (**communicative**) 状態を**第 6 段階の臨界点をとし 100 時間から 200 時間**と致します。

これは、音楽に例えると、一度聴いた音楽のメロディーを頭の中で思い出し、「再生できる」段階から「自然とメロディーを口ずさめる」状態を思い出すと理解しやすいと思います。また、会話時に頭の中で和文英訳することなく表現が出てくる状況で **What is your name?** を「ワッチュワネーム」とワンプロックで発音して、コミュニケーションが図れた状態を実体験されると理解して頂けると思います。

但し、これらの各段階でのリスニングにおいては英語表現を理解するために和訳し理解する**英文和訳習慣**を回避し、視覚のイメージから「推測」して理解する。また、スピーキングにおいては日本語から英語表現に転換するために英訳して表現する**和文英訳習慣**を回避して、音のイメージで表現し、発音、文法に拘ることなく意思疎通を図り、自分の話す英語が完璧でなくともコミュニケーションを重視し、誤りを気にせず、表現しようとする姿勢と意識改革が進捗の条件となります。

これらの各段階に至るまでの、教授法や特殊な方法論は別として、トータルイマージョン環境における英語の習得段階と臨界点について検証いたしました。これらの検証は私的な経験と体験から考察した「音のイメージ」と「視覚のイメージ」による英会話学習法 **Listening & Speaking with Rhythm & Action** に基づく仮説であり、データに基づく立証ではないことをご理解願います。

IX. Teaching Policy について

日本の CA における英語教育事情とブリティッシュヒルズが築いてきた独自の教授法を私的な観点から検証し、イマージョン環境における教育効果及びブリティッシュヒルズの教授法と方法論を考慮し、ブリティッシュヒルズ、教育研修部としての教育基本方針概要を以下のように総括いたします。

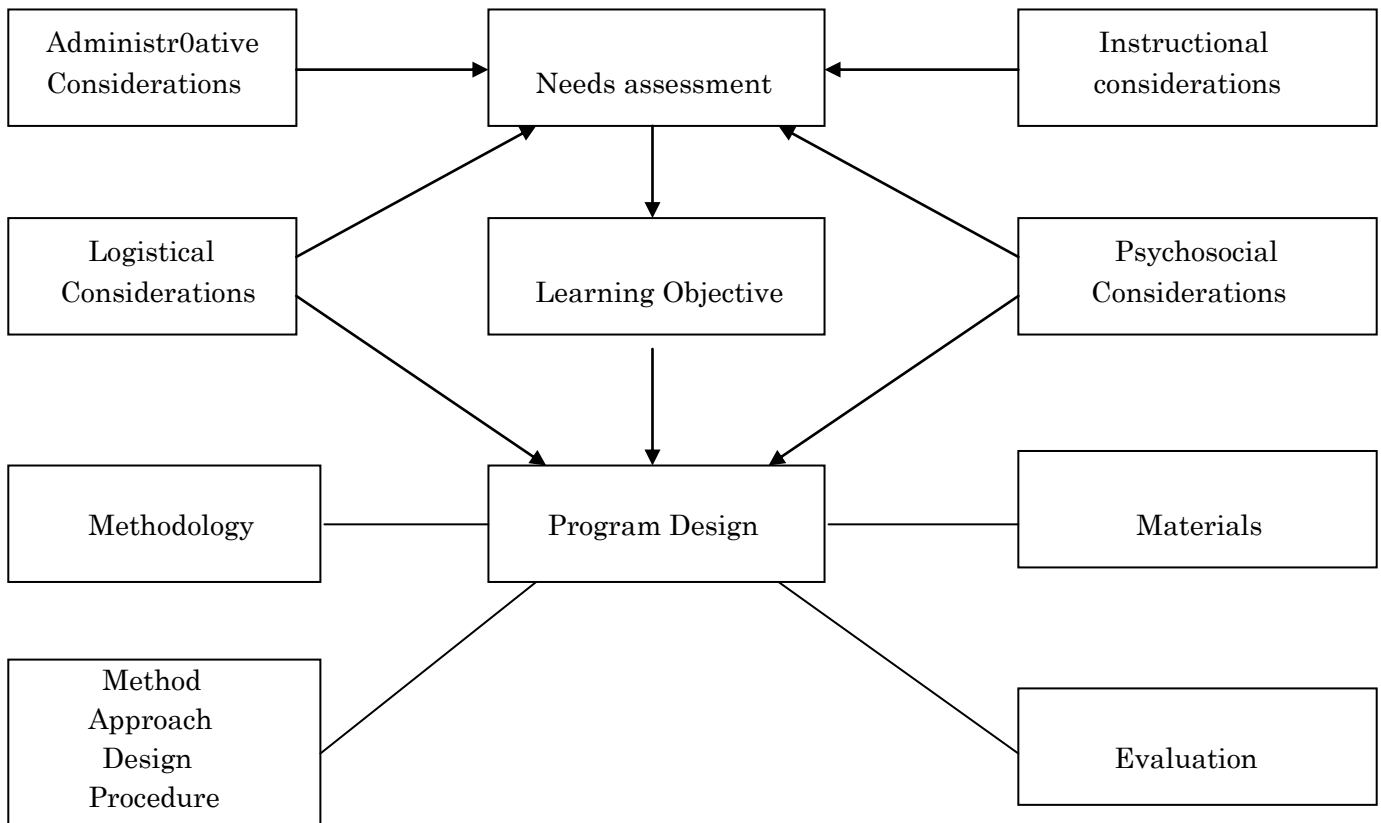
British Hills Teaching Policy



参考資料

Language Curriculum Development Processes

Needs Analysis



英語教育カリキュラムを開発するに際して配慮すべきことの一つは、受講生が英語を習得したら、それを将来どういう目的で使用するかということを知り、それとの関連においてニーズとゴールを分析し、英語カリキュラムの内容を設計する必要があります。また、実際の授業展開では **Method**、**Procedure** においては、受講生の「興味」・「語学」・「知的」等の各レベルを考慮する必要があります。

※ 参考文献 「日本の CA をもう一度考える」 上智大学 吉田研作先生

(2006.11.21)